
安くて新鮮

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

安くて新鮮

【Nコード】

N0276Z

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

第一次大戦後のドイツの町ハノーヴァー。この町で人間の骨が頻繁に見つかる様になった。同じ頃いい肉を売る店が有名になっていた。この二つの関係は。実際にあったお話です。ナチス政権誕生までのドイツにはこうした怪奇な殺人事件が頻発していた様です。

第一章

安くて新鮮

第一世界大戦が終わりだ。

ドイツは絶望的な不況に陥った。戦争による財政破綻だけでなく連合国側から突きつけられた莫大な賠償金、それに産業の崩壊もあった。

しかも戦死者も多く働き手も減っていて町には孤児も溢れていた。まさに夢も希望もないだ。絶望的に陥ってしまったのだ。

だがその中だ。

ハノーバーだ。ある評判が立っていた。

「へえ、あの肉屋の肉か」

「そんなにいいのか」

「安くて新鮮？」

「しかも美味いってのか」

「そりゃいい店だな」

ドイツは食糧不足にも陥っていた。そこも問題になっていたのだ。

だが、だ。その中だ。その肉屋は。

安く美味いと評判になっていたのだ。その店は。

「ハールマンって人がやってるのか」

「その人の店か」

「そんなにいい肉売ってるのか」

「じゃあ一回行ってみるか」

「そうしようか」

噂が噂を呼びだ。多くの者がその肉屋に行った。そしてだ。肉を買っていく。そうして料理して食べてみると実際に。

「美味しいな」

「ああ、これはいい肉だ」

「確かに新鮮だしな」

「滅茶苦茶安いしな」

「今こんな肉が食えるなんてな」

「こない話ないぜ」

こう話されるのだった。ハノーバーの市民達の間で。

だが、だ。その肉屋の主のハールマンについてはだ。まず主婦達
が話した。

「私達が店に行ったら嫌な顔をするのよ」

「何か来るなっていう感じだね」

「あれはどうしてかしらね」

「まさか女嫌い？」

「ひよっとして」

こうした疑念が起こったのも当然だった。しかもだ。

ハールマンはいい歳をして独身だった。おまけに男といつも一緒
だった。それを見れば余計にだった。

「まさかと思うが同性愛者か？」

「そういえば男には愛想がいいな」

「特に少年にはな」

「そうだよな」

「じゃああいつやっぱり」

「そっちな」

まずはだ。この線を疑われだした。しかしだ。

この時はだ。それを嫌がられるだけで済んだ。

「いい趣味じゃないけれどな」

「だよな。けれどな」

「今はもうそれじゃ捕まらないしな」

「じゃあいいか」

「それならな」

これだけで済んだ。

「肉は美味しいしな」

「いつも新鮮で安い」

「ならいいか」

「それで」

肉屋としてはいいからだ。それでよかった。肉屋は肉が売りだからだ。

だからそれで済んだ筈だった。しかしだ。

当時ハノーヴァーではだ。奇怪な事件が起こっていた。町を流れるライネ川にだ。

白骨が流れるようになっていたのだ。それを見てだ。

ハノーヴァーの市民達はだ。怯えずにはいらなかった。

「またか」

「これ、頭の骨だぞ」

「こっちはアバラか」

「何で人間の骨が流れてくるんだ？」

「まさかと思うが」

「ここだ。多くの者がだ。」

考えてはならない、だが考えずにはいられない考えに至った。

その考えとは。この世で最も恐ろしいことだった。

「食われたのか？」

「じゃあ何にだ？」

「熊か？狼か？」

まずは獣が疑われた。

第二章

「獣に食われたのか」

「まさかと思うが」

「いや、ここは町だぞ」

「ハノーヴァーだぞ」

普通獣は町にはいない。森にいるものだ。だからこの予測はだ。すぐに否定された。有り得なかった。となるとだ。

次はだ。異形の者達の存在が噂された。

「狼男か」

「悪魔か」

「吸血鬼か」

そうした存在ではないかと言われた。

「まさかと思うがな」

「ジエヴォダンの野獣が出て来たのか？」

「この国にもまた」

「出て来たのか」

かつてフランスのジエヴォダンで暴れ多くの者を殺した謎の獣だ。巨大な狼だとも狼人だとも若しくは殺人鬼が正体だったとも言われている。

その謎の獣がだ。ハノーヴァーに出て来たのではないかというのだ。

「野獣がドイツにも出て来たのか」

「あの野獣が生きていたのか？」

「まさか、あの野獣は死んだぞ」

「ルイ十五世の時に」

流石に今生きているとは考えられなかった。異形の存在にしてもだ。しかもその野獣は殺された筈なのだ。それではだった。

謎は深まった。では誰がだ。この白骨になったものに付いていた

肉を食ったのか。何しろその骨に残った肉にはだ。食われた跡があったのだ。

食った者が何者か、人々はさらにだった。

考えてはならない考えを巡らせ。そして。

答えが出た。一つの答えが。

「人間か？」

「まさか。それはないだろ」

「人間が人間を食うなんて」

「そんな筈がない」

「幾ら何でもな」

「そんなことは」

この考えだけはだ。誰もがすぐに否定した。そしてそれと共に一刻も早く忘れようとした。しかしそれでもだった。その考えは。

脳裏にこびりつき離れない。どうしてもだ。それでだ。

あらためてだ。骨について調べられた、すると。

警察はだ。ここで一つ重要なことに気付いたのだった。それは。

「全部男だな」

「ああ、少年か男娼のものだ」

「どれも目鼻立ちが整っている」

「行方不明を届けられていた子もいるな」

「?この子は」

そのだ。白骨になった少年の中にだ。

ある少年のことがだ。彼等の目に止まったのだった。その少年は。

「ハールマン氏と一緒にいた少年じゃないのか？」

「ああ、ハールマン刑事か」

「あの肉屋の」

ハールマン刑事というのは仇名である。実はだ。

彼は警察の協力者だったのだ。事件の情報提供を積極的に行っていたのだ。肉屋であり商才のある彼は闇市の顔役だったのだ。

警察に協力し事件の解決に協力するのだ。刑事と呼ばれていた

のだ。しかしだ。

彼はだ。警察からも不審に思われている点があった。それは。

「前科があるしな」

「ああ、少年を強姦して捕まってな」

「精神鑑定でもおかしいと言われてたな」

「前科も二つ位あつたな」

「どれも少年の猥褻絡みだ」

つまりだ。素行に問題があつたのだ。

それでだ。警察も彼は全面的に信頼していなかった。むしろ何かをしているのでないかとだ。最初から疑って見ていたのである。

だからだ。彼等はだ。ハールマンを見てだ。

それでだ。彼等はだ。

「あの男、知っているのか？」

「この事件のことを」

「若しくは関わっているか」

「まさかと思うがな」

「調べてみるか」

こうしてだ。極秘のうちにだ。ハールマンへの捜査がはじまった。すると。

第三章

早速だ。彼のアパートの住人がだ。
バケツの中に血塗れの肉を持って出入りしている彼を見つけたの
だ。

それを見てだ。住人は喚きだした。

「その肉は何ですか!？」

「何かって？」

「だからその肉は一体」

「豚肉ですよ」

ハールマンは素っ気無く答えた。

「ただの豚肉ですよ」

「本当にですか？」

何故かだ。その住人はだ。

本能的に怪しいものを感じた。その肉を見てだ。

それでだ。言うのだった。

「おかしいんじゃないんですか？」

「まさか。そんなことはないですよ」

「いや、何か」

おかしいとだ。住人は疑念を消しきれずにだ。

警察に通報した。しかしこの時は。

ハールマンはこう言って終わった。

「肉屋が肉を持っていておかしいんですか？」

「それはそうだが」

「だが」

「肉屋は肉を持っているものです」

何でもないと口調でだ。ハールマンは警察にも言った。

「それだけじゃないですか」

「それだけですか」

「じゃあ」

「はい、只の豚肉です」

またこう言うハールマンだった。それでだ。

話は終わった。この時にだ。しかしだ。

警察はハールマンへの疑念を深めてだ。捜査を続けた。より慎重に。

その中でだ。まただった。

ハールマンが補導し突き出した少年がだ。あることを主張したのだった。

「僕はあの人に襲われたんですよ」

「襲われた!？」

「ハールマン氏に」

「はい、そうです」

そうだとするのである。

「あの人は同性愛者で」

「部屋で襲われたんですよ」

「それは本当か」

「彼に襲われたのか」

「そうなんだな」

これがだ。かなりの決め手になった。それでだ。

警察はだ。すぐに動いた。ハールマンのアパートに急行してだ。

そうしてだ。すぐにだった。

彼の部屋に入る。するとそこには。

ハールマン自身がいた。彼は平然としていた。

そしてだ。こうその自分の部屋に慌しく入って来た警官達に答え
た。

「何かあったのですか？」

「少年を暴行したそうだな」

「間違いないな」

「さて、何のことでしょうか」

平然としてだ。そのチヨビ髭の顔に笑みを作った。

彼はだ。こう警官達に話す。

「私は確かに同性愛者ですが」

「そうしたことはしていない」

「そう言うのか」

「はい、全く」

何もしていないという顔そのものの子オト場だった。

「その通りです」

「そう言うのならいい」

「だがそれでも話は聞かせてもらおう」

「それはいいな」

「やれやれですね」

全く何でもないといった顔なのだ。ハールマンの言葉は続く。

しかしだ。警官達はだ。

彼の部屋の隅々を調べて回った。その中でだ。

ふとだ。部屋の隅のバケツに気付いた。ブリキのそのバケツは。

血で満たされていた。異様にどす黒い不気味な血でだ。

しかもそこにはだ。髪の毛が見えていた。それを見て。

第四章

さしもの警官達も蒼白になった。そのバケツの中にあるものをだ。だがハールマンは目ざとく彼等の視線に気付いてだ。そのバケツを取ってだ。

即座に窓の向こうに捨てた。彼の部屋は川のすぐ側にある。その側に捨てて何でもないようにした。さしあたっては。だが、だった。警官達はだ。蒼白になったままだ。彼に対してだ。こう告げたのであった。

「来い」
「署にだ」

こうしてだった。彼は取り調べられることになった。その結果だ。

彼の意志薄弱と診察された精神科医の診察も少年に対する猥褻行為も細かくわかった。その生い立ちもだ。

そしてそれ以上にだ。彼の異常な犯罪のことがだ。

何とだ。甘言で浮浪者の少年や男娼達をだ。犯した後でだ。喉笛を食い千切ったのだ。己の口でだ。それからだ。その骸をだ。

捌き自分の店で売っていたのだ。余った分は他のルートに流す。遺品やそうしたものもだ。そうして濡れ手に粟の利を貪っていたのだ。

そしてだ。彼はこんなことを言った。

「死体は幾つあっても足りなかったさ」

「おい、何人殺したんだ」

「一人や二人じゃないか」

彼の話はどれもだ。警官達が聞くに耐えないものだった。

それでだ。中には嘔吐する者もいた。

少なくとも彼等は彼の話の聞くことにはかなりの忍耐を必要として

いた。

しかしだ。彼だけは平然としてだ。

それでだ。その殺した数についてはだ。

「五十人は殺してゐるだろうな」

「五十人も食い殺したのか」

「こいつは人間じゃない」

「化け物だ」

「おいおい、そんなこと言うのかよ」

啞然とする警官達にだ。

ハールマンは笑つて返す。全く何でもないと口をつた面持ちで。

そしてだ。こんなことも言うのだった。

「まあ美味い奴は外見でわかるけれどな」

「くそつ、全然悪びれてないぞ」

「それだけの人間を食い殺してもか」

「全くか」

誰もがだ。これには啞然となった。

そしてだ。調べた結果だ。

ハールマンが食い殺したと断定できるのは二十七人いた。つまり間違ひなくそれだけの人間を殺しただけでなく獣の様に食つたのだ。

この事実は裁判席でも言われた。それを知つてだ。

ドイツ中は大騒ぎになつた。この頃はそうした事件が多いせいからだ。

ドイツ人達はだ。こんなことを言つた。

第五章

「またか」

「また人食いか」

「最近こんな事件が多いな」

「全くだ」

騒ぐが何処か納得していた。そうした事件が多かったからだ。

第一次大戦の後のドイツは何もかもが荒廃していた。人心もだ。

その為こうした事件もありそして荒廃した心の人々もだ。

そうしたことが起こってもだ。いささか無反応だったのだ。驚き

はしていても何処か無反応でだ。醒めた口調で言ったのである。

しかしだ。家族を食い殺されたかそう思われる者達は違った。ハ

ールマンに対して怒りを露わにさせていた。その中でのことだ。

ハールマンにだ。子供を食い殺されたと思う親がだ。裁判の場で

その子供の写真を見せて彼に詰め寄った。そうしたことがあった。

「御前がうちの子を食べたんだ？」

「そいつをか？」

ハールマンは少年の顔写真を見た。そうして言葉を返した。

「そのガキか」

「違うか！御前が食ったんだな！」

「馬鹿を言え」

ハールマンはその親にだ。せせら笑ってまた返した。

「俺がそんなことをするかよ」

「御前は食うだろ！人を！」

「ああ、そうさ」

そのことは認める彼だった。

「ついでに言えば同性愛者さ」

「ならだ！御前が食ったに決まってる！」

「そんな不細工でまずそうなガキをか？」

何故せせら笑っているのか。ハールマンは自分から話した。

「ふざけるな。俺はグルメなんだ」

「グルメだと？」

「人つてのは外見で大体美味いかまずいかわかるんだ」

まるで牛や豚の肉について話す様な言葉だった。

「そのガキはまずいな」

「うちの子がまずいだと！」

「ああ、まずいな」

完全にだ。食べ物を見ての言葉だった。

「そんなガキ誰が食うものか」

「何て奴だ、人は食い物が」

「俺にとつてはな。それにな」

ここでだ。ハールマンは嘲笑しながら。

そのうえでだ。こんなことも言った。

「他の奴等もだよ」

「他の奴等？」

「誰だそれは」

「誰のことなんだ？」

「まだ食った奴がいるのか？」

共犯者ではないかと思われた。しかしだ。

ここでだ。彼は言うのだった。

「俺の店の肉を食った奴等。安くて新鮮で美味いって言ってたからな」

彼が今言うのはこのことだった。

「その連中も食ったからな。その連中も楽しんでくれたからな」

これが彼の言葉だった。そしてその話を聞いてだ。

店の客だった者達はだ。話を聞いたその瞬間にだ。

口を押えるか嘔吐した。その事実を知ってだ。そしてハールマンはその彼等の話を聞いてまたしてもせせら笑うのだった。

そんな彼の判決はだ。もう決まっていた。

死刑しかなかった。誰もこのことに驚きはしなかった。

そしてだ。彼がギロチンにかけられてだ。あるものが残った。

その脳だ。脳は保管されることになったのだ。

その脳をだ。多くの者が見てこう言うのだった。

「こいつはどういった奴だったんだ」

「人を何十人も食い殺した同性愛者か」

「何人殺しても平然としていたっていうが」

「何を考えていたんだ」

「この脳は」

そのことはだ。誰にもわからなかった。だが、だ。

事実としてだ。ハールマンが少年や男娼達を何十人も犯し食い殺していたのは紛れもない事実だ。その事実だけは今もはっきりしている。

安くて新鮮

完

2011・8・29

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0276z/>

安くて新鮮

2011年12月1日01時48分発行